

日本音楽集団コンサートシリーズ No.36

佐航音楽演奏会

一人と外曲の系譜

'76.10.4(日)後7時開演
日仏全館ホール

日本音楽集団推薦

琴・三絃専門

琴光堂和楽器店

〒156 東京都世田谷区赤堤 2-25-7

☎ 東京 03 (328) 2802

横浜 045 (363) 5448

日本音楽集団

〒150 渋谷区神宮前6-16-14 小早川ビル
電話 409-5374

今回の企画・構成 宮田耕八朗

一、^{やぶれ}菅笠節

一節切 / 宮田耕八郎 三味線とうた / 杉浦弘和

二、末の契

琴古流尺八 / 三橋貴風

都山流尺八 / 坂田誠山

三絃とうた / 坂井敏子

こと / 野坂恵子

松浦検校

作曲

八重崎検校

こと手づけ

三、比良

尺八 / 田嶋直士

三絃とうた / 砂崎知子

こと / 花房はるえ

宮城道雄

作曲

四、古典の技法——四つの楽器——

尺八 / 藤崎重康

三絃 / 飯吉圭子

こと / 吉村七重

十七絃 / 池上早苗

藤井凡大

作曲

~~~~~ 休 け い ~~~~~

五、凸

——三群の三曲と日本太鼓のための協奏曲——

三木 稔

作曲

高音尺八 / 宮田耕八郎

十三絃 / 砂崎知子

太棹三絃 / 坂井敏子

篠笛・能管 / 望月太八

二十絃 / 野坂恵子

琵琶 / 田原順子

低音尺八 / 福田輝久

三絃 / 杉浦弘和

十七絃 / 宮本幸子

太鼓と指揮 / 田村拓男

## 菅笠節

一六六四年発行の糸竹初心集は一節切・箏・三味線の入門書で、その頃の流行歌をほとんどユニゾンで合奏していた様子がうかがわれます。楽譜は今私たちにとつては大変に難解ですが、研究者によつて整理されたものもあります。とはいへ、その時代の音楽を再現することは、もとより無理なことですから、糸竹初心集の譜にはあまりこだわらず、形態だけ一応近い形で演奏してみましよう。なお、尺八演奏家で一節切の研究者としても有名な渡辺浩風師に貴重なご助言をいただきましたことを感謝いたします。

## 末の契

松浦検校（？）一八二二年は地歌の京流手事物の大成者で宇治巡り・四季の眺・深夜の月・四つの民（以上松浦の四つもの）そのほか末の契・若菜・新浮舟・里の暁・玉の台など数多くの作品を残した人です。

末の契は丁度尺八にとつても鳴り易い旋律のせい、か、尺八家にもわりあい好まれていた曲です。もつともそれは作曲者にとつては意図しなかつたことでしょうけれど。

六段・千鳥に代表される古典（尺八家にとつて外曲）は琴古流・都山流それぞれが概ね三味線とよく似た旋律を吹くのが常ですが、それでもひとふし聞けばあきらかに流の区別が感じられる手付けになっています。その両方を聞いていただきます。

## 比良

江戸時代に三味線を伴奏とする地歌が出来、それに箏が加わり更に後世尺八が加わつて三曲合奏と言われる合奏の形態ができましたが、それと異なり、一人の作曲家による三曲合奏が、宮城道雄（一八九四年―一九五六年）によつて作られました。その積極的な創作の姿勢は彼の数多く、また多彩な作品の随所にうかがうことができ、更に楽器の改良から新しい楽器の創作にまで及んだ彼の作風は、日本の伝統音楽の発展に多大な影響を残しています。

比良は一九二三年の作曲。和漢朗詠集、春の部、早春三首のうち兼盛の和歌

みわたせば比良の高嶺に雪消えて

若菜つむべく野はなりにけり

春を迎える喜びを三絃が本調子↓二上りと転調しながら表現します。同じ宮城道雄の作品でやはり春をうたい、三下りで通している軒の掣（一九二六年作曲）と実に対照的な作品となっています。

## 古典の技法——四つの楽器——

一九六三年の作曲。作曲者の多種の楽器による合奏曲としては以前に尺八・箏・十七絃のための四重奏曲（一九五九年作曲）があり、一九六〇年の箏と十七絃による三重奏曲などを経て、この曲に至るまでに、古典への接近が大きくなっています。四重奏曲では従来までの伝統的な技法や楽器の限界に対して妥協のない呵責を感じた演奏者も少な

くなかつたと思ひますが、古典の技法にあつてはこのような責め苦は、とりはらわれた感がありま  
す。しかしこれは、古典への追隨や降服もしくはは  
演奏者へのあわれみなどではなく、古典への讃歌  
と發展への自信と見るべきでしょう。それは古典  
そのままではなく、演奏者にとつてやはり四重奏  
曲を難なく通りぬけなくては古典の技法を充分に  
表現することができません。

一九六八年頃にはこの作品やそのほか、大編成  
でNHKの現代の日本音楽の時間などでさかんに  
放送されたことは、日本音楽集団結成当時のメン  
バーにとつては大変なつかしい思い出ですが、今  
日ここで演奏する者たちは、かすかに知るだけ  
です。

#### ■ 凸——三群の三曲と日本太鼓のための協奏曲——

日本音楽集団一座の座つき作曲家三木稔が一九七〇  
年にコロンビア・レコードの委嘱で作曲。

第一部と第二部とに分かれています。演奏は続  
けて行きます。第一部はきまつたりズムを感じさ  
せること無く各楽器の討論会とでも云いませう  
か、お喋りをして、その喧噪がパタリと止むと、  
琵琶がうたい出して第二部となります。第二部は  
第一部とうつて変つて、作曲者の脳裏からどうし  
ても離れることのできない故郷徳島の阿波おどり  
風のビートを執拗にくりかえします。

第二部にあるカデンツァは従来、野坂恵子（二十  
絃箏）のものと杉浦弘和（三絃）のものが各々何  
度も演奏されてきましたが、今回は尺八で聞いて  
いただきます。

#### ■ 企画・構成にあつて——宮田耕八朗

江戸時代、尺八は虚無僧専有の法器とされ、一般  
庶民の吹奏は禁止されてきました。一八七一年  
（明治四年）に普化宗が廃止され、尺八は広く庶民  
に親しまれ盛んに箏や三絃と合奏するようになり  
ました。この合奏する曲を外曲と呼び、普化宗の  
僧（虚無僧）の時代の宗教音楽を本曲として区別  
しました。ですから尺八家が外曲と言えば地歌・  
箏曲のことを言つたわけですが、この外曲との関  
わりが尺八にとつて非常に大きな転機となりました。  
楽器として音階的にも技法としても、かなり  
質的な変革を少しづつ行い、それは本曲の演奏に  
まで変化をもたらし、又当然ながら、本曲の演奏  
法も外曲の演奏に少なからぬ影響を与えています。  
それは一人尺八の変化だけにとどまらず、他のさ  
まざまな要因ともからみあつて、伝統音楽の發展  
的継承と新しい日本音楽創造の土壌を作つてきま  
した。

一節切は、もとより今の尺八とは別種なものです  
が、江戸時代前期に行われていた箏・三絃などと  
の合奏が、後の三曲合奏の下地を作つたものでし  
ょう。

今回の演奏会は外曲という言葉が生れた過程をふ  
まえた上で、言葉づかいとしてはかなり拡大して  
います。